

三章 満子

ラブホエツチに淫らに濡れて、

ハマって溺れる巨乳美熟女有閑未亡人

【完全解禁版】

「でね、出かける前にお問い合わせがあるの」

「何ですか？」

「今あたしが触ってるモノをしゃぶりたいの。でね、お口の中にミルクをたっぷり出してもらいたい」

ずっとチノパンの上から、満子は股間の膨らみを片手で撫でさすっていた。

「いいですけど、なんでそんなに急ぐんです？」

「うん、実は徹さんのオチンチン味わってから、もう忘れられなくなっちゃって……。昨日も今朝もオナニーしちゃった。あの時は何度もあたしのオマンコにオチンチンいれてもらったでしょう。でもフェラは晶子が徹さんにしただけね。しかも一回だけ。あたしは、一度もフェラさせてもらっていないのに気づいた。だからどうしても早く一人フェラして徹さんの精液を味わいたくてしょうがないの」

「わかりました。ここに座りますから、満子さんの好きなようにしてください。ちょっと待ってくださいね」

立ち上がり、デスクを背にしてドアの方に身体を向けた。

ベルトのバックルを外すと、前留めフックを外し、前立てジッパーを下ろした。そのままチノパンを足元に落とす。トランクスも足元に落とす。

「嬉しい。徹さん、あたしにすぐ触れるようにしてくれたのね」

無言で両脚を大きく開いて再び椅子に腰を下ろす。木製丸椅子の座面の冷たさが尻に触れる。火照り始めた肌には心地良い。

満子が舐めやすいようにしてやろう。座面の前に玉袋から肉棒の先を出して座った。両手は、両膝頭の上に置く。

満子も立ち上がって、徹の真ん前に回り込んだ。そのままフロアカーパーツにひざまずく。折った両脚の膝を開いて椅子の前に座った。

ドレスはミニ丈なので、満子の太腿の半分以下を隠すだけだ。しかしスカートの下裾の中で、股間と太腿は窮屈に見える。水色の薄いストッキングに包まれた両太腿が精一杯開かれていた。両脚は大きくM字に開いている。ヒップは左右の脚の真ん中に落ちていた。女にしかできない開脚座りである。

悩ましい眺めだ。

肉棒はすでに大きく硬さも最高潮に達している。

「なんで、もうこんなに大きくなったの？」

「たぶん、今の満子さんのセクシーなワンピースドレスを見ながら、日曜日の晩、遅くまで三人で愉しんだ場面を思い出してるからです」

「そう？ 家ではたいていこんな格好だけどセクシーに見えるの？ 自分でお買い物するの

は好きじゃないし、デパートなんて外商さんが来てくれる。必要もないからあんまり外に出ないのよ。でもジムには出かけたりはするかな。移動は車しか使わない。あたし、人の目をあんまり気にしたことないの。それに大胆なデザインの服が好きだからかな？」

（これが本当の富裕層なんだろう）

「満子さんがその姿で街を歩いたら、男たちはみんな振り向きますよ」

「へええ、そうなの？」

大きく硬くなった肉棒を満子は触り回している。徹の話題などに関心を持たないようだった。

「ねえねえ、そんなことよりこの皮を剥いていいかしら？」

上目遣いの真顔で、許可を求める。無言で頷くと、満子は笑顔を見せた。

柔らかく肉竿を握る。亀頭に半分被る皮を、ゆっくり丁寧に優しく引いていった。亀頭がすっかり露わになった。鈴口には先走り露が出ている。

そして熱を持つ柔竿をあちらこちらに向けて、剥き出しの亀頭を観察した。匂いも嗅いでいる。

「キレイねえ、この濃いピンク色ついていやらしくて大好き……。見ほれてしまうわ」
凄じ言葉を口にした。でも満子らしい。が、下品に感じることはない。

「おしっこの匂いも全然しない。シャワー浴びてきたの？」

また上目遣いに訊いた。

「こんなことがあるかもしれないと思って、磨きあげておきましたよ」

「あたし、おしっこの匂いや味がしても平気だけど、徹さんのその気持ちが嬉しい。この出るお露舐めてから、オチンチンしゃぶってもいい？」

「満子さん、あとは何も訊かなくていいですよ。舐めても、しゃぶっても、しごいてもいいです。僕をイカせて、精液ミルクを味わってください」

満子は嬉しそうに目を細めると、すぐさま舌先で亀頭の先走り露をひと舐めした。

「美味しい……。何年ぶりかしら？　これ味わえるの……。ほとんど味しないけどコクがあるのよねえ」

球体状のピンクの亀頭の、あらゆる表面に、赤い舌を伸ばして這わせる。ゆっくり舐め回す。左右のかりや裏筋にもしっかき舌をすべらせた。

（たまらんっ、気持ち良すぎる）

亡くなった旦那さんに、フェラテクを仕込まれたんだろう。こんな焦らし舐めなんて、玄人並みのテクだ。たっぷり長く味わうためには、本能の爆発を抑えなければならぬ。だが、随分とそれに苦勞しそうだ。

（晶子のフェラが『神経の束をピンポイントで弾く刃』なら、満子のフェラは『熱い粘膜で包み込んで溶かす泥』だ。このまま肉体の快感に脳を明け渡せば、三十秒と持たずに精液溜まりの堰が決壊する）

早速『理性の盾』を起動する。例えば脳内で論理的思考を立ち上げる。

脳の興奮リソースを強制的に散らさなければならぬ。射精欲本能を頭の中から逸らせる武器だ。

（東南アジアの新しい需要は何だろうか）

（今日の夕食はどこで食べようか）

当然、今は、晶子に最初のフェラをされた時のように、意地を張って『射精を我慢する勝負』をする気持ちは全くない。

しかし、満子のフェラへの熱い思いを考えれば、こちらも相応に射精を長く我慢して、満子にフェラする愉しみをたっぷり堪能させてやりたくもあった。

ならばこそ、このフェラを味わう中で、本能と闘うために『理性の盾』を何度も作り直すのはやぶさかでない。

まだ満子にフェラの醍醐味を愉しませる時間が始まったばかりである。テクは晶子同様にプロ並みだから、別の意味での『真剣勝負』の心構えが必要である。

今度は、満子は亀頭を丸ごと口内に含み、舌を自在に操って舐めしゃぶり始めた。プチゅぴちゅる、ちゅるチュルっと、亀頭を舐める小さな音が響いていた。

合わせて、肉棒を柔らかくしごき始める。二つの強烈な快感衝撃が、混じり合って脳髄に突き刺さった。

「ウツ、……、うつ、……、ウウウ、……、ふうツ、……、ウツ、……、むうう、……」

射精欲を我慢する懸命の声を漏らす。膝頭を深くつかんでいる。両手のひらの五本の指は、第一関節を曲げている。爪を立てんばかりだ。晶子とはフェラテクは違うが凄腕である。

吐精衝動との闘いはこの後、さらに激戦になっていくはずだ。

やがて、満子はゆっくり肉棒を口の中から抜き出すと両手で肉竿を握り直しながら、顔を上に向けた。表情は笑顔ながらも少し不安げに見えた。

「どう？ あたしのフェラは気持ちいい？ 久しぶりだから上手にできてるかなあ……？」

「上手どころか、最高です。ブランドなんか心配しなくていいですよ。何度も出しそうになりました」

「いつ出してもいいのよ。さっき言ったみたいに、あたし、徹さんの精液ミルクを味わって吞みたいんだから」

「わかってますよ。でも、満子さんが久しくしてないフェラでしょ。満子さんに存分に長く愉しんでもらいたくないじゃないですか？」

「きゃあ、うれしいっ。徹さんってホントに優しくて素敵ね……。じゃあ、こんなフェラどうかしら？」

満子は両手で握っている肉竿に唇を近づけて亀頭を口の中に再び飲み込んで収めてしまう。そしてそのまま肉竿の先を口内に進めていった。喉元の終着点を確かめている。

肉竿を握る両手は肉棒の根元近くまでずらしでいった。

やがて、肉棒を咥えたまま上目遣いに笑顔を見せると、ゆっくりノーハンドのお口ピストンを始めた。

肉棒の周りに舌裏を這わせながら、しばらく続ける。

ジュボジョ……、じゅぼじよ……、ジュボジョ……、じゅぼじよ……と淫猥な音が響き始める。

今度は息を吸って口内を真空状態にする強烈な吸引ピストンに変えた。バキュームフェラだ。ジュバばばっ……、じゅばババツ……、ジュバばばっ……、じゅばババツ……と響きが、大きく派手で淫らな音色に変わった。

しばらくすると、満子はバキュームフェラから普通のお口ピストンに戻して、おしゃぶりを続ける。

不意に肉棒を口から放し、再び上目遣いに笑顔を見せて訊いた。

「これからスピード上げるけど一番気持ちいい速さになったら、肩たたいてね。あたし、徹さんの好きな速さを覚えたい。それでピストンするわ。いつミルク出してもいいわよ」

無言で頷くと、満子はお口ピストンを再開した。

速度が確実に上がっていく。

チュパツ、……、くちゅっ、……、チュパツ、……、くちゅ、……、クチュツ、……、チュパ

ッ、じゅぽっとお口ピストンから漏れる肉棒の挿抜音の質が、スピードが上がるにつれて変わった。

この卑猥な音のテンポも速くなっていく。

『これが最高だ』という速さになった。あまり速いピストンは好みではない。満子の肩をたたいた。

すると再度、肉棒を口内から抜いた。顔を上に向けると笑顔を見せて言う。

「わかったわ、このスピードね。これに緩急の変化つけてお口ピストンするわよ。たぶん徹さんにとって最高のお口ピストンにできると思う」

「すごいなあ、そんなこと言える女の人なんてなかないませんよ。満子さんはフェラマスターなんだなっ……」

「そうかなあ、あたしは男の人とのエッチは亡くなった旦那さんとしかしてなかったから、旦那さんに教わったフェラをやってるつもりだけけど……」

間違いない。亡夫のセックステクニクは達人級だったろう。

そして満子にとって久しぶりのフェラである。満子は習い覚えたフェラテクを全て使って愉しみたいのだ。

「満子さん、自信もってください。満子さんのフェラテクなら、たいいていの男ならあつという間にお口に射精してしまいますよ。だからそれぞれのフェラテクは相手を見て、単独で使い分

けるんです。相手が若い子なら、二度目からの勃起回復を早くするのに使ったらいんですよ。相手が経験豊富なら、アドリブでいろんなテクの順番を入れ替えるのもおすすめです」

「なるほどね。いいこと聞いちゃった。でも当分は徹さんのオチンチンだけを味わうわよ」
ケラケラケラと満子は屈託なく笑い声をあげた。

「あら、大変。おしゃべりしてたら、オチンチンの元気が少なくなっちゃったわね。今度はこれで、元通りの元気いっぱいな子にしてあげるわよ」

満子は、にわかに右手のひらで肉棒の先の亀頭を包み、肉竿を徹の腹に付くほど上に向けた。そして、舌尖でなんと左右両方の玉舐めを始めた。

この予想外の奇襲にたじろぐ。

もちろん、肉棒はすぐに最高の怒張を取り戻してくれた。

舌の腹を使った舐めだ。玉袋が快感にむせび泣いている。たまらない心地良さだ。また快楽神経を快感衝撃が直撃した。

（スゴい、そしてマズい）

まさかの玉袋舐めを食らって、射精本能を我慢できない瀬戸際に追い込まれた。何度も作り直した『理性の盾』も一気に崩壊してしまいそうだ。

（ヤバイ、もうもたない）

満子の唇が玉袋から離れ、再び亀頭を口に啞えた。

しかし奇跡が起こった。ありがたいことに、満子は口を動かさない。

不思議に思い、満子の姿に目をやった。肉棒を口に入れたままで、満子は左手を空けて、スカートの中に入れている。

ノーハンドフェラゆえに両手を肉棒にそえないから可能な動きだ。

ピチヨピチユ……、ぴちよぴちゅ……、ピチヨピチユ……、ぴちよぴちゅ……と小さく淫靡な音が、耳を澄ますと聞こえてきた。

満子はフェラしながら、淫部いじりを始めている。快感に酔い始めたのだ。

ハツとした様子を見せて、満子は咥えたままの肉棒へお口ピストンを再開し始めた。しかし左手はやはりスカートに入れたままである。

（美貌の満子の、肉棒を咥えて崩れる表情はとてつもなく可愛らしく、愛おしい）

こう思えたのは、完全破壊されかけた『理性の盾』が再起動した証拠だ。寸前で理性が本能を押し戻したのだ。

「ウウウ、うう、フウウ、むうう、ウウウ、ふうう、ウツ、ううう、ムウウ、うう」

我慢の唸りは、音が低くなりながらも激しく強くなっている。最高の喜悦を味わいながら、『理性の盾』で気を逸らし、精を吐きたいという本能にひたすらあらがう。

第一関節を曲げて、膝頭を深くつかむ両手指の爪は、もはや筋肉に食い込んでいた。額には脂汗すらうっすら浮かび始めていた。

どれほど長くフェラしてもらっているのだろうか？　ありえないが何時間も続いているような気さえする。『愉悦の無間地獄』にいるようだ。

疲れ果てた。

（時が来れば我慢をやめる）

最初の思いの通り、お口ピストンを充分愉しめたら、無理に着火本能との闘いをするのはやめるのだ。

口内の温かさの中で、唾液を挟んで這い回る舌の触感に、肉棒は悦びの叫びを上げ続けている。

この快感刺激の連続に、本能を抑える限界点が近いと悟る。だが充分に愉しめた。その時が来たのだ。

ついに精の迸りが解き放たれた。

一気に奥から駆け始める。精の奔流が激しい勢いで、肉棒の中を突き抜けた。

「うっ、ウウウ、でる、デル、でますう」

満子が口内の肉棒をしっかりと啣えた。

ドクツ、びゆるっ、ドクツ、びゆるるつと、脈動の中で白濁液が満子の口内に噴き注がれる。

数度にわたる放出の快感の中、満子が肉棒を口に含み続けていた。徹の腰を両手で抱きしめ

たまま、満子の身体は痙攣をしている。白濁液を口の中に浴びながらフェライキをしたのだ。しばらく声も漏らさず、小さくなった肉棒を口に含んで放さない。快感余韻を愉しんでいる。やがて、その余韻が消えたのだろう。満子は口の中の精液を、舌を動かしてしばらく味わう。そして喉に通して呑み込んだ。

すぐに満子はその肉棒を口の中から放す。いたわるように両手で撫で回してくれた。

「よく頑張ったわね。ご褒美にお掃除してあげるわよ」

元気を失って小さくなった肉棒に向かって話しかけている。

ひざまずいた姿勢はそのままに、お掃除フェラをチュル、ちゅる、ピチュと音を立てて、口だけを使い丁寧に始めた。お掃除と称しながら肉棒に残り付いている精液も味わっている。間違いない。

一滴の雫も漏らさず、フェラを終えた満子は、再び小さいイチモツから口を放した。

「徹さんの精液はすごく美味しかったわ。フェラで味わう精液なんて、旦那さん亡くなって、初めてだもん。フェライキまでしちゃった」

満子は照れながら笑みをこぼした。

だが、ふと自分の太腿の間に手を這わせ、濡れた指先に気付く。小さく声を上げた。「あら、大変。オマンコ汁でランジェリーを汚しちゃった。穿き替えなくちゃ。徹さんも出る準備して。あたし、すぐ戻って来るから出かけましょうよ」